

新婚 旅行記

泣いて笑つて
うれし楽し

鹿児島県牧園町編



泣いて笑ってうれし楽し新婚旅行記

1997年3月1日 第一刷発行

編 者 鹿児島県牧園町
泣いて笑ってうれし楽し新婚旅行記募集実行委員会
発行者 石渡知徳 編集担当／辻 晋泰
発行所 株式会社 パロル舎
〒113 東京都文京区本郷1-10-13
T E L 03-3813-3046
F A X 03-3813-3034
組 版 スマイル企画
印 刷 モリモト印刷＋東光印刷所
製 本 榎本製本

Printed in Japan

©1997 Parole-sha

新婚

泣いて

笑ふれし樂也



張子角記



鹿児島県牧園町編

パロル舎

目次

新婚旅行記

目次

私たちの新婚旅行……………6

大賞……………9

優秀賞……………13

入選……………25

佳作……………67

特別賞	167
-----	-----

審査員を代表して	216
----------	-----

あとがき	218
------	-----

牧園町と坂本龍馬	222
----------	-----

ブックデザイン 道吉剛・稲葉克彦＋MDL
カバリーイラスト 小林敏也

私たちの新婚旅行

浜畑賢吉・上村香子

結婚というものは考えてみれば不思議なものだと思う。互いに愛し合ったり、惹かれ合ったりしたとはいえ、それまで全く別の家族や環境の中で生きてきた二人が、突然ある瞬間から共同生活を始めるのだ。そしてその第一歩として新婚旅行に出るわけだから、習慣の違いやら考え方の相違やらで、かなりトンチンカンな行き違いがあっても当然なのだ。むしろそれは、夫婦の絆を強める為の小さな試練なのかも知れない。

私たちの場合もご多分にもれずの珍道中。何しろ七月に出会って、八月に婚約、十二月に結婚式をあげてすぐに旅行という慌ただしさであった。急な事と、正月

を挟んでいたから何処へ行くのも満員。知人に頼み込んでやっと入れて貰ったのが、インドネシアのバリ島ツアー。

年の暮のスケジュールをやり繰りし合い、やっとの事で結婚式にこぎ着けた後だったから、頭も身体もへとへと。「特別な目で新婚さんに見られるのは嫌だから、疲れた顔をするのはやめような」とは言ったもののバスの中でも寝てばかり。仕方なく翌日の観光ツアーをキャンセルして、海岸の木陰で夕方まで、誰に気がねすることもなくひたすら情眠を食った、と言うのが新婚旅行最初の思い出なのだ。

しかし一休みしたらすぐに元氣を取り戻し、夜にはさっそくツアー全員が私たちの部屋に集まったの酒盛り。羽田でそれ用に買って行った大ビンのウイスキーと、持ちよりのつまみで大いに盛り上がった。さてそうなると氷が足りなくなる。ホテルで頼めばいいのだが、そこはそれ、酒が入ってしまったらそんなことは誰も考えない。「水道の水で次々に作ればいい。生水はいけないけど氷にすれば大丈夫！」

言ったのは確かに私、氷で殺菌出来ない事くらい常識なのに。しかし一人も反対しなかったのは、皆雰囲気酔っていたのだろうか。とにかくその晩は、全員

が仲良くなれた素晴らしい出会いに満足して別れたのだが、翌日から徐々に下痢症状の人が増えていった。私は日頃の訓練？ のせいかなんでもなかったのに、家内は下痢の上に高熱まで出してしまった。しかもそれが帰る日になってである。そしてそこにまた事件。何と、航空会社の無責任なオーバーブッキングで、塔乗券を貰っていながら、我々グループはジャカルタ空港に積み残し……。

そんな事も今になれば全て楽しい思い出であり、ツアアの仲間と今だに集まって笑い話にしているが、あの時は病人を抱えてのトラブルで、大変な思いをしたものである。

皆さんの旅行記を拝読して、人との出会いや心のふれ合いといった、感動的なお話には涙し、すれ違いにハラハラし、失敗談には思わず笑ってしまいながら、皆、同じなんだなと、それぞれの短編ドラマを楽しませて頂きました。青くて、若くて、もぎたてのリンゴのようにフレッシュな香り、それこそが新婚旅行なんですね。

結婚生活が一冊の本とすれば、新婚旅行はその第一ページを飾る、華やかなカラー写真付きのエッセイと言えるかもしれません。

大賞

新婚旅行記

忘れて取られて

愛知県 長井 幹具（男性） 58才

「えっ仏滅、仕方ないよ忙しくて日が取れないんだから、なーに迷信、迷信。何が仏滅よ迷信糞くらえだ平氣、平氣」

調子のいい事を云った常識外れの結婚日。

式を終えた後の大阪のホテル、部屋に入って財布を出そうとしたら、モーニングの中に入れ忘れた事に気づき、仕方なく地元に住む伯父さんに電話をして現金をホテル迄届けて貰う羽目になった。

そして翌日、熊本の駅近くになって降りる用意をしていると胸の辺りがムズムズとする。変だ、胸に手をやると今度は買ったばかりの財布がない。

「スリだ」

思わず声を出すと女房が

「あの人よ、あの人」

すぐ四、五人前を行く男を指差す。私は確とその男の顔を覚えると、早足で歩く男の後を追う。男が改札口を通り抜け、私が通り抜けようとすると

「お客さん切符、切符」

駅員が無賃乗車と間違えて私を追う。

「おい待てよ」

前の男に声をかけるが、知らん振りを装って歩いて行く、私が走ると男も走りだす。（所詮捕まえても力で負けるか）半ば諦めかけていると、後からパトカーが来て、公安官が男を逮捕した。

「駄目でしょ、スリならスリと騒がないと」

何時来たのか女房がいて、今まで見せた事のない恐い顔。私は彼女の一面をかいま見た思いで公安室に行くこと

「男はスリの前科があって、指名手配中ですから逮捕されましたが、回しと云って拘るとすぐにブツを仲間に渡すものですから……」

結局その仲間が見つからず、財布は返ってこないまゝ、時間も無駄。新婚旅行は女房の財布を当てにして……。

この一件があったお陰で、私はブーツと女房に頭が上がらなかった。今は仏滅を信じている。

優秀賞

新婚旅行記

返ってきたアルバム

兵庫県 木村 都久子（女性）48才

十一月三日の文化の日、ことぶき列車に乗ってやって来た九州。車輛ほとんどが新婚カップル。前も後ろも新婚さん。今なら異様に見える光景ですが、四半世紀も昔、特別列車で行く新婚旅行に、幸せいっぱいでした。もちろん、ういういしい私のこと、恥かしさ半分、不安半分でもあったのです。

別府、宮崎、霧島、指宿などの風景を、今まぶたにくっきり再現することは難しい。それがまた、新婚旅行と観光旅行の違いかもしれません。思い出アルバムを見れば、ぼんやりあの日がい思い出せる、そんな遠い遠い出来事でした。

阪神大震災で、子供達に頼まれた大事なアルバムは、すべて取り出したつもりでした。そして二か月後解体工事。ショベルカーがぐさりぐさりと家をつぶします。時折車を止めて、物を捜し、大事な指輪も見つけました。そんな事を何度かくり返したある時、赤くてキラキラ光るものを見ました。ショベルカーはストップ。何とそれは新婚

旅行アルバムでした。二か月も経て、ガレキの中から無キズで……。よかった、よかった。胸にギュッと抱えました。

解体中に色々取り出せましたが、買うことの出来ない思い出アルバムが、一番の収穫でした。そして開けると、私達の歴史のシミ、少し変色した写真がありました。

楽しかったはずの新婚旅行ですが、前半の顔のこわばった二人、除々に笑顔に変わっていく、いかにも新婚旅行です。主人の髪の毛もふさふさ、私もスマートでした。

こうして、大事な思い出アルバムは、再び私達の手もとに戻ってきました。